

佐賀新聞 2010(平成22)年4月28日(水) 県内文化欄 文化時評2010 【美術】

9

さが文化

2010年(平成22年)4月28日(水曜日)

佐

美術

野中 耕介

中が文化の復興、発展にまい進した戦後という「時代」の高揚が伝わってくるようで、読んでいるうちに胸が熱くなる。

めぐる状況が著しく多様化、複雑化した現在において、より大きな変化を見せ、問題となるであろうことは、実は郷土作家の「個」の確立ではな

いか。

「記憶にのこる・佐賀の美術家たち 佐賀県立美術館コレクションによる」展(主催化を考える)「新郷土」昭和49年9月号(一)などは、情理を尽くした優れた言説であり、一級の地方文化論として企画のために、佐賀県文化団体協議会(文團協)について語られる。多く示唆と刺激に溌剌た内容のそれらは、

作家にとって郷土の美術団体も、発表、評価の場と機会、方法は多数存在し、その実現は比較的容易になっている。作家にとって郷土の美術団体への参加はもちろん、そこへの視線、関心すら、必ずしも

郷土で発表する意味問う

関係者の方々の話をうかがい、各種文献(やはり『新郷土』と『佐賀県文化年鑑』が中心になる)をあたたのだが、県内各文化団体の総体であり、前身である佐賀県文化会議時代(昭和35~47年)から数えて長い歴史を誇る文団協について、その歴史、現況とともに、私が知ることができたのは、こ一部でしかない。一定の解決、改善を見たものけれども文献の行間から、郷土文化の充実を熱望した先人たちの熱気と、さらには日本についてよい。さらに、文化を

現在にこそ再読されてしかるべきではないかと切に思う。「五つの提言」に書かれた佐賀の地方の文化の現状、特にその問題点ー例えは新人の育成、社会的条件の整備と文化環境の充実、指導者の定着等ーは、35年後の今日、各作家と団体のためぬ努力により、結果として表面上は一定の解決、改善を見たものもあるが、その本質的な部分は変わらず残り続けているとの未来に通じることでもあ

| 文 | 化 | 時 | 評 |
2010

県内文化